

作品解説

能「橋弁慶」

「京の五条の橋の上。大の男の弁慶は長い長刀振り上げて。牛若めがけて斬りかかる」

童謡「牛若丸」の歌いだし部分です。能「橋弁慶」は、牛若丸と武蔵坊弁慶の五条橋での出会いのお話。

あらすじは、比叡山の僧 武蔵坊弁慶は、祈願のため五条天神に丑の刻詣（うしのこくもうで）をしようと思っていたところ、従者から「五条橋に化け物のような人斬り少年が出るので、お止めになった方が」と進言されます。

一度は思いとどまる弁慶ですが、怖気づいたと思われてはならないと、人斬りを退治することを決意します。夜になり弁慶が五条橋へ行くと、牛若丸が女装して待ち構えていました。女と思った弁慶はその場をやり過ごそうとしますが、牛若に持っていた長刀を蹴り上げられます。怒った弁慶は戦いを挑みます。

しかし、斬っても飛び上がってかわされ、離れたと思えば、あっという間に身近に迫られ、力が強く皆に恐れられていた弁慶ですが、身軽な牛若丸の動きに翻弄され、ついに、弁慶は持っていた長刀を牛若に打ち落とされてしまいます。牛若の強さにととう降参した弁慶が、少年に正体を問います。牛若は身分を明かし、二人は主従の誓いを行い、共に九条の牛若丸の御所へ帰るのでした。

古くから絵本や童謡の題材となり、祇園祭の山鉾にも「橋弁慶山」があるように、日本人に最も親しまれたお話でもあります。元の話では、千本の刀を集めるために夜な夜な五条橋で人を襲っていた弁慶が、あと一本に迫った夜に牛若に出会い、手玉に取られて降参し家来になるというものですが、能では牛若が人斬りで超人の様な存在になっています。この能は、弁慶と牛若の戦いの場面が最大の見せ場で、子方がシテと渡り合い、躍動する斬り組みは見ごたえがあります。この曲はよく知られたお話なので解りやすく、上演時間も程よい長さなので、能の初心者でも楽しくご鑑賞いただけます。

今回はその一場面。牛若丸の待つ五条橋へ弁慶が現れ、斬り組みの末、牛若が弁慶を打ち負かす場面です。

四代 諏訪 蘇山 作「青瓷花器（せいじかき）」

技法

諏訪家の青磁は胎土（*）に鉄分を練り込んであり、胎土の鉄分と釉薬の鉄分が融合した深みのある青磁の色（中国南宋時代に龍泉窯で焼かれた青磁の色）を出しています。

*胎土（たいど）・・・陶磁器を成型する際の原材料になる土

制作意図

この作品は、Do you kyoto? ネットワークの活動のために特別に作った花器です。作品を削って仕上げる時に出る削りくずを水で戻して、粘土に再生したものを主に使用しました。削りくずには鉄粉などの混じり物が入っている恐れがある為、大抵は作品を焼くときに下に引いて一緒に焼く「とちん」という道具に使用したり試作品などに使います。この作品はその再生土をメインに、下の方には制作中に生じるキズを防ぐために新しい白い磁土を使用しました。白い土を使うことによって青磁の土とのマーブル模様が生じ、たなびく雲のような模様が出来ています。」

三木 啓樂（四代表悦）作「波シリーズ」

技法

漆塗り

製作意図

生命に不可欠の水、その情景（波）を自然から手に入れられる漆で作成。日の光を浴びて変化する光の反射、時間の変化も作品の一部として捉えている。見る人により見えるものがすべて違いながら、共通するテーマを感じてもらう。共感することを大切な要素として考えている。